ポンペイにおけるベンチ型工作物に関する一考察

塚本　賢史

1.　はじめに

1-1. 研究の背景

古代ローマ遺跡には、ヴェスヴィオ山の噴火によって79年に埋没したポンペイ遺跡とヘルクラネウム遺跡、一世紀から二世紀ごろ港都市として繁栄したオスティア遺跡がある。[1] これらの遺跡における人々の生活の様子は建物の内部空間に限らず、建物のファサード、車道、歩道、水汲み場などで構成される街路から読み取れることがある。それぞれの遺跡の街路の特徴としてポンペイ、ヘルクラネウムでは歩道が車道から一段上がっており、歩道上に石造やコンクリート造の物体が確認できるのに対して、オスティアでは歩道と車道が同一高さとなっており、歩道上に石造やコンクリート造の物体が確認できないことが挙げられる。

ポンペイのPraedia Iuliane Felicis のアトリウムには都市内で木製のベンチ型工作物に腰掛ける人々の生活風景を示した壁画が残っており、建築物外で着座して会話を楽しんでいた様子がみてとれる。

1-2. 対象概要

木製のベンチへの着座は壁画資料から確認されたが、ベンチ型工作物がベンチと同様に使用されていたかどうかは不明である。ここでいうベンチ型工作物は、建物の玄関脇に設置された直方体の構造物のことであり、後述する先行研究には言及されていなかったものの写真1、写真2に示すようにコンクリート造もしくは石造のものがあると確認できた。過去の発掘調査によって掘り出され、放置されたと思われる柱などの構造物や、ポンペイに1つだけ確認できた円柱の転用と考えられる円形の構造体は当時からその場所にあったと確証が得られないため本稿では対象としない。ヘルクラネウムでは、ベンチ型工作物は8つ確認されたが、ポンペイとヘルクラネウムでは街路の様子が異なること、また、後述する建造物からの石材を転用した可能性があることを踏まえると、ベンチ型工作物の素材やその設置が街路空間に及ぼす影響に差異が出ることが想定される。そのため本稿ではヘルクラネウムについては一旦脇におき、北東部の未発掘部分を除いてベンチ型工作物が都市内の歩道面に広く分布していることが確認されたポンペイに限定して考察を進める。ベンチ型工作物はポンペイの建物の内部にもあり、ベンチ型工作物が内部にある建物の一つにREGIO Ⅰ INSULA XV-3にあるCasa della Nave Europaがあげられるが、ポンペイ内の多くの建物が施錠されている現状があり、建物内部を調べることは困難であるため、街路空間のベンチ型工作物のみを研究対象とした。なお、本稿の対象であるベンチ型工作物は全てが壁面に接しており、独立して設置されたものはなかった。さらに、踏査においてREGIO Ⅲ 6やREGIO Ⅰ 10-18に位置していたコンクリート造のベンチ型工作物には塗装が塗られた痕跡が残っていたものの(写真3)、石造のものには

写真1 コンクリート造ベンチ型工作物の例
(REGIO VII Insula IX-12付近)

写真2 石造ベンチ型工作物の例
(REGIO Ⅰ Insula XV-2,3)

写真3 スタッコの痕跡を持つコンクリート造
ベンチ型工作物の例(REGIO Ⅰ Insula X-18)

そういった塗装の跡はみられなかった。

1-3. 先行研究

古代ローマのベンチ型工作物に関する先行研究として、ハートネットによるものがある。ハートネットは座るために意図して作られた建造物をベンチ型工作物と定義した。ユウェナリスの風刺詩集、マルティアリスのエピグラム、プラウトゥスの喜劇で語られる情景を都市の大通りが社会的な役割を担っていた証拠として挙げ、街路の研究の重要性を述べている。ハートネットはベンチ型工作物に焦点を当て都市空間と社会問題に迫った理由として、ポンペイに少なくとも 100 個のベンチがあり、公表文献には定期的にベンチ型工作物の存在が記されているにもかかわらず体系的な調査が行われていないことや私的な内部空間と公的な外部空間とのかかわりを理解できる可能性があること、ローマ法や考古学的分析と組み合わせることができることを述べている。記録写真から、ヘルクラネウムのサンティカの家にあるベンチ型工作物は修復によって大きさが改変された可能性があるとし、寸法を用いずベンチ型工作物の分析を行った。キケロやセネカなどの述べたことから、ベンチ型工作物に外で座るための単純な場所と家のファサードを象徴するものの 2 つの意味があるとした。また、図 1 に示すベンチ型工作物のプロット図と街路に面した出入り口の街路の長さ当たりの密度から、いくつかの例外を除いてベンチが、道路幅が広くて出入り口の多い、つまり人通りの多い通りと、道路幅が狭くて人通りの多い通りに分類できるとした。[2)]

図 1 ポンペイ内のベンチの帰属に関するプロット

1-4. 研究の目的

本稿では、街路沿いで確認されたベンチ型工作物を対象に、それらの寸法、材質、分布などに差異がみられないかを分析する。少なくとも石造のものには修復の跡がみられず、コンクリート造のものに関しても上部にスタッコが一部残るベンチ型工作物を確認しているため、修復により高さ寸法が改変されていないものもあると考えられる。ハートネットがベンチを着座するものと前提にしたうえで研究を進めたこと、ヘルクラネウムでは寸法が改変された可能性があると述べられていたが、ポンペイにおけるベンチ型工作物では寸法が改変されたと言及されていなかったことを考慮し、本稿では新たな情報源として寸法を計測することとした。また、ベンチ型工作物にはポンペイ内の地域による偏在がみられるため、分布による分析も行うこととした。

2. ベンチ型工作物の寸法における分析

ポンペイ内の踏査によって確認できたベンチ型工作物のうち、座面までの高さ(以下高さ)の寸法、座面の深さ(以下深さ)の寸法を計測できた石造のもの 28 個、コンクリート造のもの 35 個について、散布図を作成した。図 2 中の外れ値である A 点に関しては REGIOⅡ Insula Ⅱ 1 にある Caupona of Astylus and Pardalus の入り口壁面に設置されており、高さ寸法が 890mm、深さ寸法 520mm であった(写真 5)。これはフレーリッヒによると上部に壁画が残っており、祭壇として利用されていた可能性があるため[3)]、全体に比べて高さ寸法が大きい。

まず、ベンチ型工作物の寸法が着座するにあたって適した値であるかについて石造のものとコンクリート造のものを区別せず分析する。現代のイタリアにおける男性の平均身長が約 176.5cm、女性の平均身長が約 165cm であるのに対し、古代ローマ人の男性の平均身長が 164cm、女性の平均身長が 154cm であり、[4)]現代人と古代ローマ人では体格が異なるため、古代に利用されてきた便所の座面と比較する。公衆便所が都市内に多くないポンペイに対し、都市内に公衆便所が散在するオスティアでは便座の保存状態が良いものがある。オスティアの Regio I-Insula XII に位置する Terme del Foro に着座

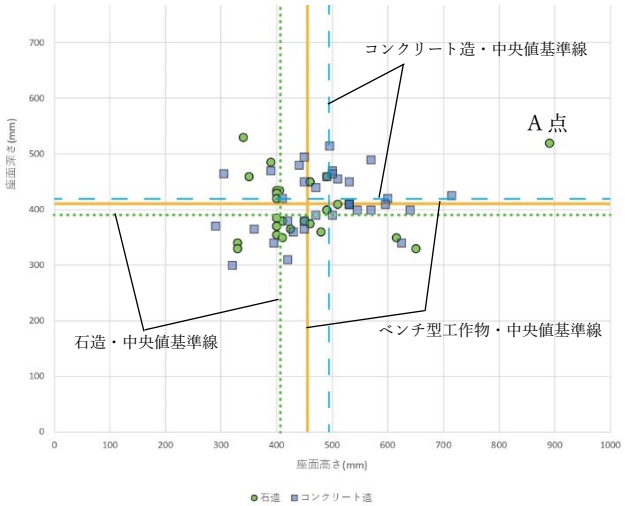

図 2 ベンチ型工作物の寸法における散布図

して利用されてきた公衆便所がある(写真 4)。スケール尺による計測を行ったところ、その公衆便所の座面高さ寸法は 480㎜、深さ寸法は 440㎜ であった。ポンペイのベンチ型工作物の中央値は高さ寸法が 450㎜、深さ寸法が 410㎜ であったのでベンチ型工作物の方が、高さ寸法が 10㎜ 大きく深さ寸法が 30㎜ 小さい。公衆便所では座面に開く穴までしか座面深さを利用していないと考えられるため深さ寸法の比較については一概に言えないが、高さ寸法にはほとんど相違がないことがわかる。したがって、ポンペイにあるベンチ型工作物は、着座するのに問題のない高さ寸法であり、ハートネットが前提としたベンチ型工作物の着座可能性については妥当だと考えてよい。しかしながら写真 5 に示すように、現存しているベンチ型工作物と、祭壇の判別が形態からは容易に判断できないため、すべてのベンチ型工作物が着座のみの利用方法しかなかったとは言い難い。

次に、コンクリート造と石造の違いについて分析する。高さ寸法の中央値はコンクリート造のものが 490㎜、石造のものが 400㎜ であり、深さ寸法の中央値はコンクリート造のものが 410㎜、石造のものが 392.5㎜ であった。ここから、コンクリート造のもののほうが石造のものより、高さ深さともに大きい傾向があると判断でき、前述したオスティアの公衆便所の高さに近いのはコンクリート造のものである。石造のものの特徴として高さ寸法 400 付近に分布が密集していることがあげられ、高さ 400㎜ の石造のものは 7 つ確認した。採石する際に同じ高さ寸法の石材を切り出し、積層しやすくしていたことからベンチ型工作物のために石を切り出してい

写真 4 オスティアの公衆便所

写真 5 A 点で示すベンチ型工作物

た、ないしは何かしら別の構造体に利用されておりベンチ型工作物に利用するのに問題のない寸法をしているものから転用した、という可能性を挙げることができる。ベンチ型工作物を作成する際に寸法の自由が利くコンクリート造のベンチ型工作物は、寸法のばらつきはあるものの高さ寸法の中央値がオスティアの公衆便所とほとんど相違がない。ポンペイにおいて着座するのに適した高さもオスティアの便座の座面の高さである 480㎜ とほぼ等しいと考えることができ、石造のものが高さ寸法 400㎜ に 7 点集中していることから、石造のものはベンチ型工作物専用に切り出したわけではなく、転用された別の構造体と判断するのが妥当である。

3. ベンチ型工作物の分布における分析

踏査によって確認した、またはポンペイ内で撮影した写真により確認したベンチ型工作物について、石造のもの 28 個、コンクリート造のもの 39 個のものを図 3 に示したが、先行研究で対象としていたベンチ型工作物のなかに確認できたものと確認できなかったものがあった。

図 3 より、ヴェスヴィオ門とスタビア門をつないだ街路の北東側の地域にベンチ型工作物が集中していることがわかる。境界線となる街路に存在する 2 個を除けば、北東側には 54 個あるが、この地域に偏在をしている理由はわからなかった。

また、図 3 からアボンダンツァ通りにはコンクリート

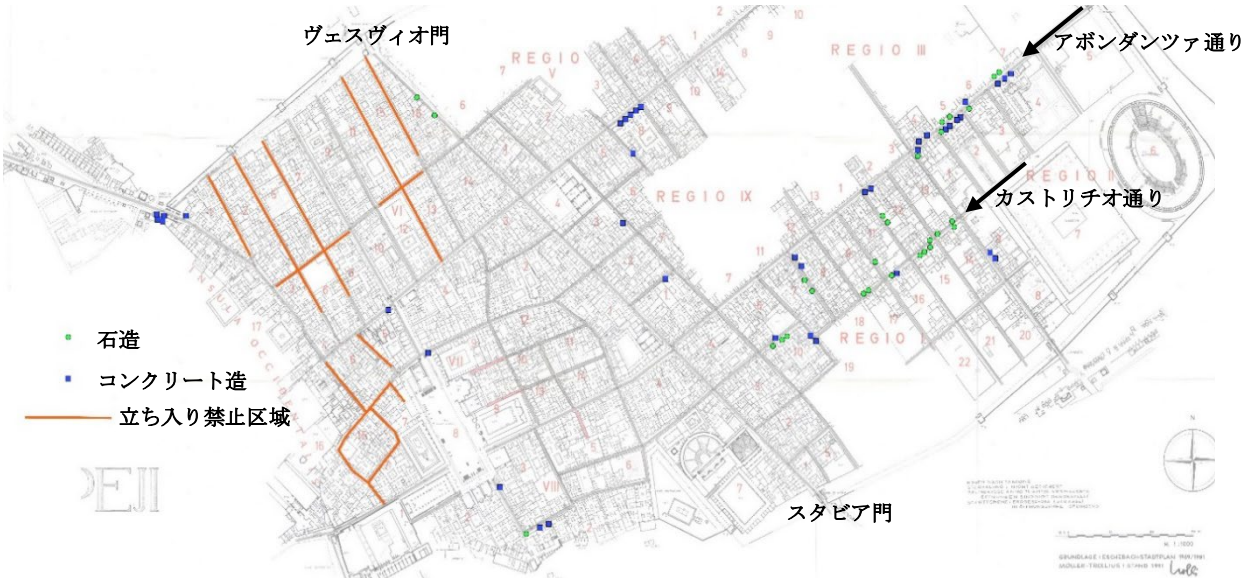

図 3 ポンペイにおけるベンチ型工作物の分布図

造のものが、カストリチオ通りには石造のものが多くみられることがわかる。ハートネットはベンチ型工作物に外で座るための単なる場所としての意味だけでなく、ファサードの象徴としての意味を見出した。カストリチオ通りはアボンダンツァ通りと比較して車道幅が狭く、主要な幹線道路とは言い難い。石造のものにスタッコの痕跡がなかったことも考慮すると少なくとも石造のベンチ型工作物にはファサードの象徴としての意味はなかったのではないかと推察する。

4. 結

寸法による分析から、ポンペイにあるベンチ型工作物は 1 点を除いて着座するのに問題のない寸法の範囲に収まっており、オスティアの公衆便所の高さ寸法との比較から、石造のものはベンチ型工作物のために切り出したわけではなく、別の構造体から転用された可能性が高いことが分かった。分布による分析ではヴェスヴィオ門とスタビア門をつないだ街路の北東側の地域に偏在している理由は明らかにできなかったものの、アボンダンツァ通りとカストリチオ通りの偏在から、少なくとも石造のものには街路における象徴性はみられないと推察された。また、ベンチ型工作物材料には、幅の広い歩道において広場のような空間を形成している疑似広場型(写真 6)と幅の狭い歩道においてベンチ型工作物が歩道の幅の大半を占めている歩道占有型(写真 7)があることを確認したものの、本稿ではとりあつかわなかったため、ヘルクラネウムにおけるベンチ型工作物についての分析、ポンペイのベンチ型工作物の個別分析とともに今後の課題とする。

写真 6 疑似広場型ベンチ型工作物の例
(REGIO VII Insula V-1)

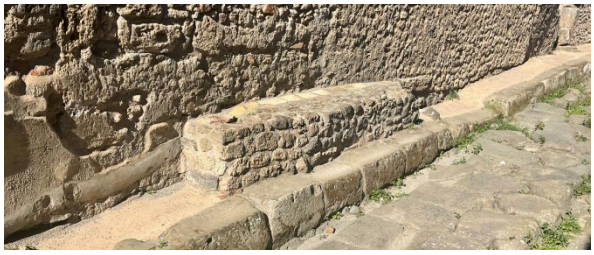

写真 7 歩道占有型ベンチ型工作物の例
(REGIO IX Insula V-20)

【参考文献】

1)Hermansen, G. Ostia. Aspects of Roman City Life. Edmonton, 1982.
2)Hartnett, Jeremy. Si quis hic sederit : Streetside Benches and Urban Society in Pompeii. Boston : Archaeological Institute of America, located at Boston University, 2008. P91-119.
3) Fröhlich, Thomas. Lararien- und Fassadenbilder in den Vesuvstädten : Untersuchungen zur "volkstümlichen" pompejanischen Malerei. Mainz : P. von Zabern, 1991. P312.
4) Laes, Christian, Vuolanto, Ville. London ; New York : Routledge/Taylor & Francis Group, 2017. P31-32.

【図版】

(図 1)参考文献 2)P.94 から引用(図 2)、(図 3)筆者が作成